長谷川滋成著
『陶淵明の精神生活』

本書は、既に東晋の詩や伝記に関する論文を多く執筆され、東晋詩に造詣の深い著者が、先行研究をふまえて東晋・劉宋の詩人陶淵明の精神生活を究明されたものである。

陶淵明の精神生活を見るにあたって、著者が設定された観点は次のようなものである。

貧窮（まずしさ）／子供（むすこたち）／分身（ふたり）／孤独（ひとり）／読書（ほん）／風景（けしき）／九日（きくざけ）／日暮（ゆうぐれ）／人寿（いのち）／飲酒（さけ）

これらの観点に基づく論考においては、作品の厳密な読みをふまえて、「本来の自分と現実の自分との間を往き来して生涯を送った詩人」（「まえがき」）である淵明の精神生活に眼差しが向けられている。さらに、淵明より以前、以後の用語・用例にも周密な調査が及んでおり、これによって陶淵明そして彼の作品が中国文学史の中に的確に位置づけられている。

陶淵明が、自らの置かれている状況の中で、何を見、何を感じ、何を思ったのか、その精神生活が明確に論述されている本書から、浅学にして中国文学に関する知識の乏しい私の中に淵明像が立体的に描き出された。中国文学研究者のみならず、陶淵明をこれから知ろうとする人々にも是非御一読いただきたい一冊である。

なお、著者は一九九四年五月に『東晋詩訳注』を上梓された。本書は、これを補完するものであることも申し添えておく。

（四六判　二八五ページ　一九九五年七月　汲古書院　三三〇〇円）

（守田　庸一）